

ふくやま産業交流館の利用者と使われ方に関する研究

無漏田 芳信* 永泉 智次**

A Study on User and Use Structure Analysis for 4 Years after Opening
in Hiroshima Prefectural Fukuyama Convention Hole

Yoshinobu MUROTA* Tomotsugu EIZUMI**

ABSTRACT

The purpose of this study is to grasp the change of the utilization structure such as region composition of the user, exhibition content and working rate of various rooms for 4 years after the opening in the Hiroshima prefectural Fukuyama Convention Hole.

(1) Though it is to know the Fukuyama Convention Hole, the user has been stabilized. But the reuse rate of the user lowers. Especially, reuse rate of user of the Fukuyama City, which occupies the most part of the user, is low. The difference between the highest value and the lowest value of monthly working rate in 2003 becomes remarkable in comparison with the working rate by the preceding year, and the change has been generated in the utilization structure. (2) The user number of the Fukuyama City increases to occupy the half, and the user number of Bingo district except for the Fukuyama City and Eastern Japan gradually decrease. The economic stagnation of manufacturing industry of the Bingo District affects the number of the user. For the offset, the entertainment mainly on the sale increases further than the product exhibition is problem, when the original role is considered. (3) By various rooms working rate of a month or a year and the working condition of big hole A ~ C, it was possible to make clear the utilization characteristics and the problem of various rooms. The training room with the facility of simultaneous interpretation hardly is used for the international conference, and the monthly working rate of it does not exceed either 40%. In the other, the working rate of the big conference room is higher than that of the training room and is lower than that of small one. Then, the defect in the floor layout of these rooms was indicated in the hole, which can use the indoor by dividing.

キーワード：ふくやま産業交流館、分割型ホール、4年間、利用構造分析、諸室稼働率、広島県

Keywords : Fukuyama convention hole, divided hole, 4 years after opening, use structure analysis, working rate of various rooms, Hiroshima Prefecture

1. はじめに

地域の産業振興や技術交流を主目的としたコンベンションホール（以下、産業交流施設と称す）が全国各地に建設されてきたが、この種の公共施設はいったん建設されてしまうと、施設の効用や役割の見直しあまり行われない。その中で、行財政改革の一環として効率的運用という観点から指定管理者制度が導入されつつあり、施設の利用効果に関する客観的な評価が求められている。

そこで、本研究では、産業交流施設の核となる展示ホールの構成タイプに注目し、その立地動向を把握した上で、産業交流施設に多用されている分割型ホールをもつ

広島県立ふくやま産業交流館（以下、ビッグ・ローズと称す。2000年4月下旬に開設）を事例とし、その開館後4年間における利用者の地域構成や利用内容、諸室稼働率など、利用構造変化や問題点・課題の考察を試みた。

分析資料には、ビッグ・ローズにおける開館後4年間の利用記録をもとに、利用者の所在地、利用目的、利用回数、利用諸室などを把握し、データ化したものを使用した。また、分析においては、ビッグ・ローズによって適宜実施された利用者を対象としたアンケート調査結果なども参考とした。なお、ここでいう利用者とは、施設の使用申込者を指し、イベント等への参加者ではない。

* 建築学科

** 藤木工務店

2. ビッグ・ローズの施設概要と産業交流施設の動向

2.1 ビッグ・ローズの施設概要

ビッグ・ローズは、福山市北部の福山平成大学の南隣にあり、2000年4月下旬に開館して5年余りが過ぎた。ビッグ・ローズは、中・四国地方における最大級ホール(4,500㎡)をもつコンベンション施設で、人・物・技術の交流拠点として(旧)産業会館に替わって整備された。

ビッグ・ローズは、図1に示すように、JR福山駅から約10km(車で約20分)、山陽自動車道の福山東I.Cから約7km(車で約15分)に立地している。建物は、図2の平面略図に示すように、大ホールや小ホール、同時通訳ブースを備える研修室や5つの大・小会議室などで構成されている。ビッグ・ローズは、レセプション、国際会議、展示会、販売会、スポーツ、レクリエーションなど多様な用途に対応できる施設として計画された。柱のない大ホールは天井高が12m(最大高18.4m)で、3分割(図2の大ホールA~Cの合計は約3,000㎡強)され、スポーツ・レクリエーション用の大ホールD(約1,440㎡)との一体的利用もできる構造となっている。

2.2 産業交流施設の立地と展示ホール

各都道府県別における産業交流施設の立地数を表1よりみると、都道府県内に4施設以上の立地は、東京都・

静岡県・愛知県・京都府・大阪府・兵庫県・福岡県となっており、いずれも大都市圏で主要な工業地域を抱えているところである。また、同じく2施設、3施設の立地も、全国的に知られた工業都市をもつ都道府県である。

全国にある産業交流施設(77施設)の展示ホールの空間構成を検討すると、図3に示す独立型、分割型、複合型の3つのホールタイプに大別することができる。図3に併記した施設数から、産業交流施設の約6割は分割型ホールとなっていることがわかる。この展示ホールタイプと開設時期の関係を図4よりみると、初期の開設は独立型となっているが、1960年代後半から第1次オイルショック頃までは複合型の開設が目立っている。その後、分割型の開設が増加しているが、バブル崩壊の1990年以降の開設では分割型が約8割を占めており、最近では利用面積の自由度が高い分割型の開設が主流となっている。

展示ホールタイプ別に展示ホールの延べ面積の頻度分布を図5よりみると、2,000㎡以上6,000㎡未満の事例が多く、分割型ホールの場合には面積の大小に関わらず出現しているが、面積が小さい施設では独立型が多く、同じく大きい施設では複合型が多くなっている。なお、紙数の関係で割愛したが、5,500㎡以上の場合は、東京国際展示場など超大型クラスの事例がほとんどである。

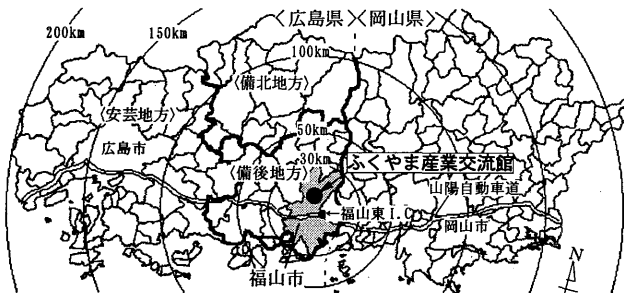


図1 ふくやま産業交流館の立地状況

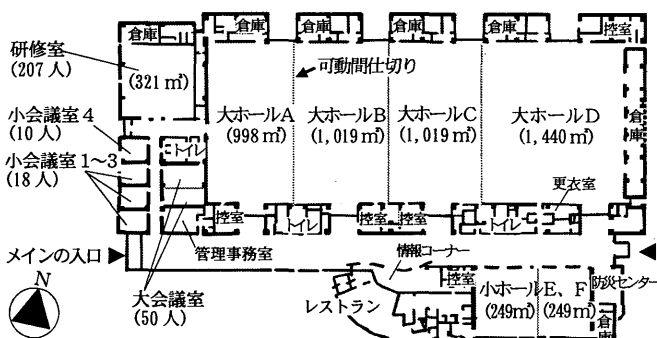


図2 ふくやま産業交流館平面図

表1 各都道府県における産業交流施設の立地数

	1施設 (20施設)	2施設 (14施設)	3施設 (9施設)	4施設以上 (34施設)
都道府県名	青森県 秋田県 岩手県 山形県 宮城県 栃木県 埼玉県 千葉県 山梨県 長野県 石川県 和歌山県 岡山県 鳥取県 島根県 山口県 香川県 徳島県 愛知県 沖縄県	福島県 北海道 神奈川県 新潟県 福井県 富山県 岐阜県 三重県 広島県 熊本県	東京都 静岡県 愛知県 京都府 大阪府 兵庫県 福岡県	

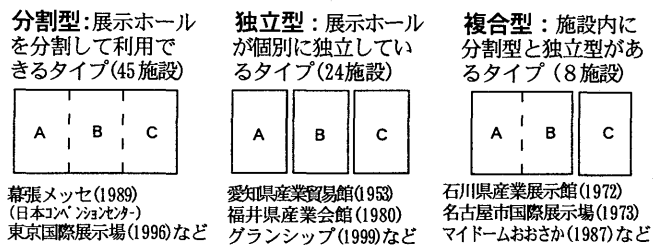


図3 産業交流施設の展示ホールのタイプ分類

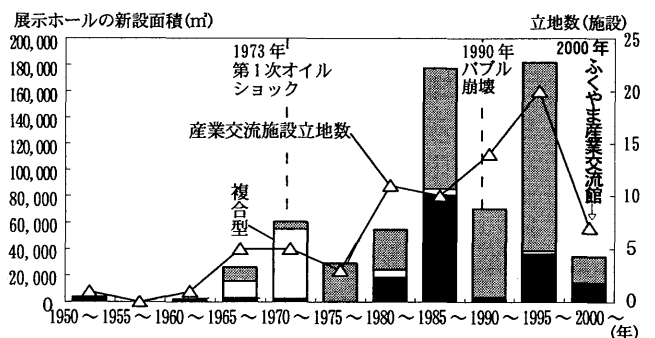


図4 産業交流施設の開設時期と展示ホールタイプ

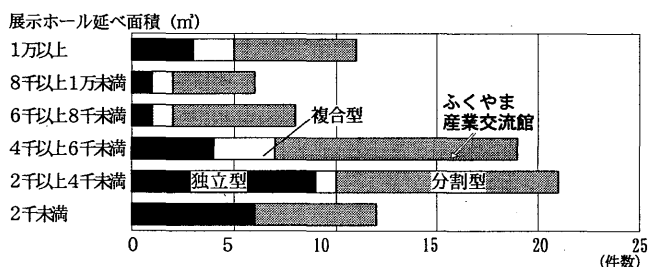


図5 産業交流施設の展示ホールタイプと延べ面積別施設数

3. ビッグ・ローズの利用者の概要

3.1 登録団体（利用者）の経年推移

ビッグ・ローズの利用は、その性格上、予約制となっているので、予約を受けると当該団体または個人は自動的に登録される。ビッグ・ローズの利用者は、この登録団体（個人の場合も含む）のことを指している。まず、利用者の全体的な概況について検討してみることにする。

登録団体数の4年間の変化を新規登録と再利用に分けて示したのが、図6である。新規登録者としては、3年目以降の新規登録数が初年度に比べて約3割減となっている。また、初年度の登録団体のうち約5割は次年度も利用しているが、初年度および次年度の登録団体が次々年度に再び利用している数は約1/3に減少している。この傾向を反映して、年間の利用面積と利用者が企画・開催したイベントの入場者数は、図7に示すように、利用面積、入場者ともに年々減少していることがわかる。

次に、登録団体による月別延べ利用日数の4年間の変化を図8に示した。同図より、開館直後の一時期を除くと、各年度ともに近似したグラフ形状となっており、4月または12月の利用者が全般的に少なく、この4月および12月が利用の端境期となっている様子が指摘される。

3.2 利用日数と利用目的の経年推移

図9には、ビッグ・ローズの各年度における目的別構成割合を示し、帯グラフの右端に各年度の延べ利用日数を付記した。これを見ると、展示販売（展示のみも含む）が各年度ともに全体の半数程度を占めており、二番目に多いセミナーを合わせると、これらでビッグ・ローズの延べ利用日数の大半を占めていることが読み取れる。そのほか、スポーツ・レクリエーション（以下、スポレクと称す）、面接、会議の利用があげられるが、交流会は年度による利用の違いが著しい。各年度に占める割合は会議・セミナーが年々減少しており、2002年度まで増加していた交流会も2003年度には減少に転じているが、面接は漸増傾向を示している。年度別の延べ利用日数は、開設初年度の利用可能日数が約1ヵ月短いことを考えると、2002年度までは横ばい状態であるといえるが、2003年度になると、延べ利用日数は微増傾向を示している。

4. 各地域におけるビッグ・ローズの利用状況

4.1 地域別利用者の延べ利用日数

年度別延べ利用日数の地域別構成割合を示したのが、図10である。この図を分解して、各地域ごとに年度別の利用構成割合の推移の様子を示したのが、図11である。

これらを見ると、初年度は福山市の利用者が全体の4割強を占め、福山市を除く備後地方、備後地方を除く広島県、岡山県が各1割という構成割合を示し、西日本と東日本で3割弱を占めている。しかし、2年目になると東日本の占める割合が激減しており、西日本の場合もや

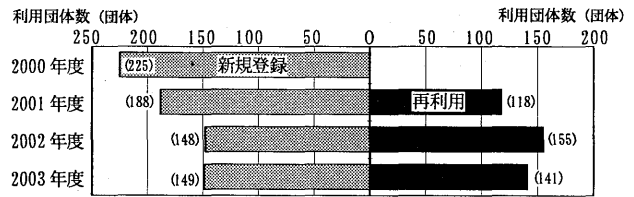


図6 新規登録と再利用

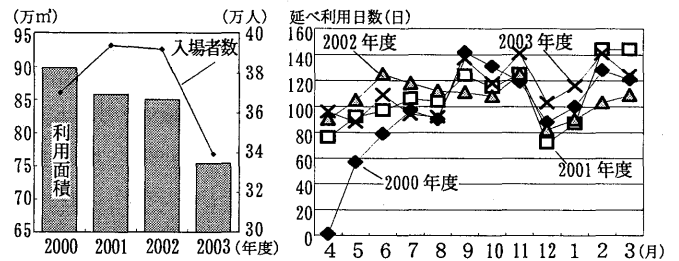


図7 利用面積と入場者数

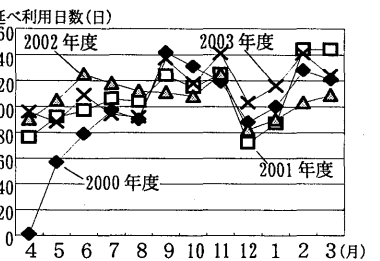


図8 月別延べ利用日数の経年推移

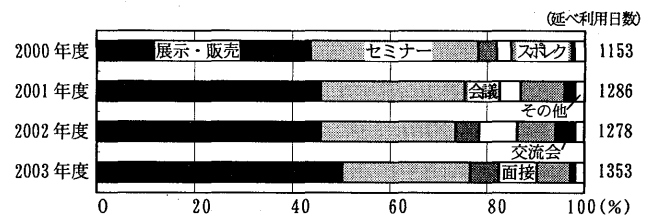


図9 年度別延べ利用日数の利用目的別構成割合

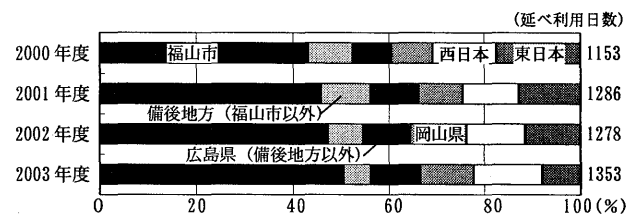


図10 年度別延べ利用日数の地域別構成割合

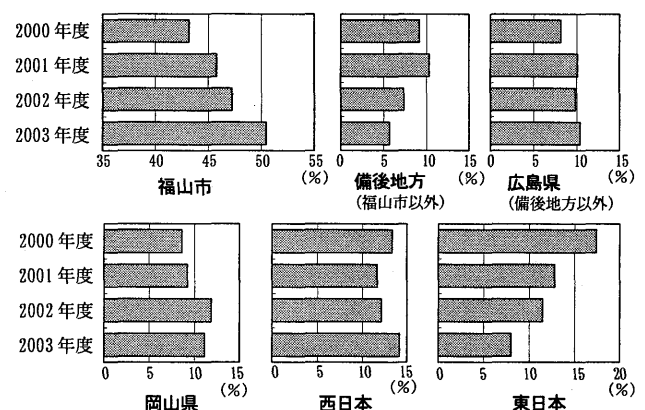


図11 各地域の占める延べ利用日数割合の経年推移

や減少し、岡山県や広島県などはほぼ横ばい状態という状況に変化している。3年目に入ると、これらに加えて福山市を除く備後地方の占める割合が低下しており、福山市の占める割合がさらに高くなる様子がうかがえる。

4.2 地域別利用者の次年度利用

地域別利用者の構成割合の変化の要因を探るため、登録団体の新規登録と次年度利用の様子を地域別にみると、2000年度に登録した団体

が次年度にも利用する割合は、福山市と岡山県、西日本が約50%、東日本は約70%となっているのに対して、備後地方では40%、広島県は25%の値にとどまっている。これが2002年度の利用になると、福山市は30%弱、西日本は30%、東日本は50%弱にまで低下しており、備後地方を除く広島県は半減している。しかし、備後地方や岡山県は次年度の2001年度と同じ値を示しており、顧客化傾向がうかがえる。一方、2001年度の新規登録の場合には、次年度の再利用率が各地域ともに軒並み低下し、高い値を示していた福山市、西日本、東日本でも20%台となっており、そのほかでは10%台前半という次年度の利用率となっている。なお、年度別の利用者数の経年変化としては最も比重の大きい福山市の利用者数は2002年度までは漸増しているが、2003年度には初年度以下に減衰している。また、広島県や東日本の場合には2001年度に比べて2002年度以降の落ち込みが著しくなっている。

4. 3 地域別利用者の利用目的

地域別に延べ利用日数の経年推移を図13よりみると、福山市の利用者は漸増傾向を示しているが、福山市を除く備後地方や東日本の利用者は漸減しており、備後地方を除く広島県、岡山県、西日本では頭打ち状態となっていることがわかる。図13には各地域における利用目的の内訳も示したが、これを見ると、福山市や備後地方などの広島県内では、いずれも展示販売やセミナーを中心とした利用内容であることが理解できる。岡山県や東日本でも同様な傾向をみせているが、岡山県では交流会が、東日本では面接が目立っている。また、西日本の場合には展示販売に特化した利用内容となっている。なお、スポレクは福山市を含む備後地方にほぼ限定された利用であり、面接には福山市を除く備後地方や岡山県ではほとんど利用されず、地域による利用の違いをみせている。

次に、各地域における利用目的別延べ利用日数の構成割合の経年推移を図14よりみることにする。これをみる

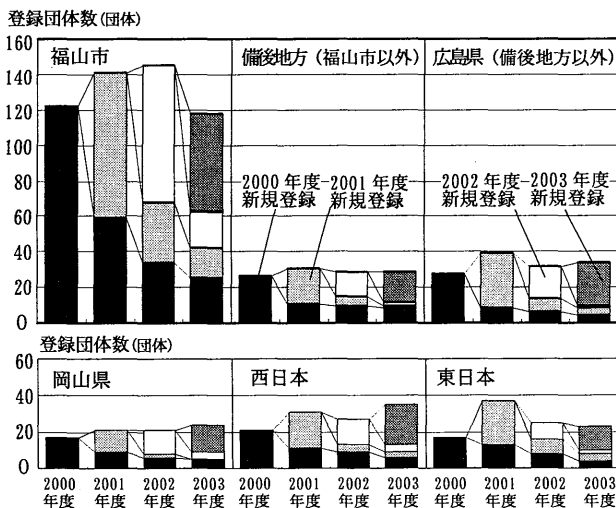


図12 各年度の地域別利用団体数と登録年度の構成

と、福山市や備後地方では利用目的が展示・販売と会議・セミナーでほぼ折半されていることが読み取れる。岡山県や東日本でも同様な傾向がみられているが、前者は交流会が、後者は面接が他地域に比べて多いことが特徴といえる。ただし、岡山県では2003年度に展示販売が急増している。一方、西日本は展示・販売が4年間通して大半を占めている。また、備後地方を除く広島県は初年度に西日本に次いで展示販売の占める割合が高い値を示していたが、最近ではその割合はかなり低下している。

4. 4 地域別利用者の利用日数と来場者

展示・販売や会議・セミナーなど各利用目的における4年間の平均利用日数と平均来場者数を地域別に示した

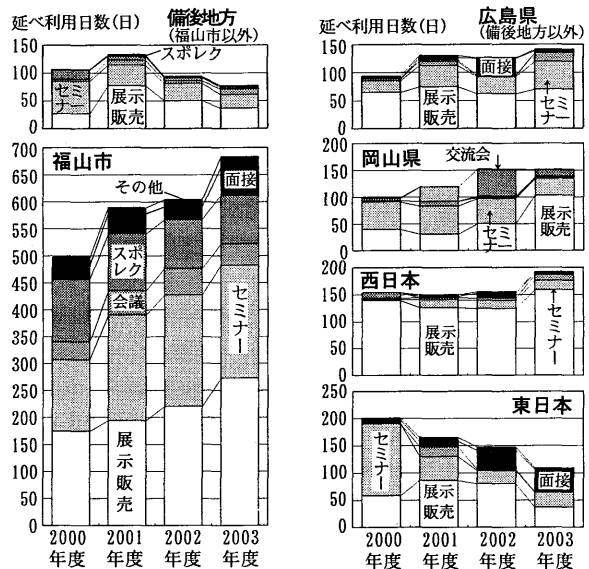


図13 各地域の年度別・目的別延べ利用日数の経年推移

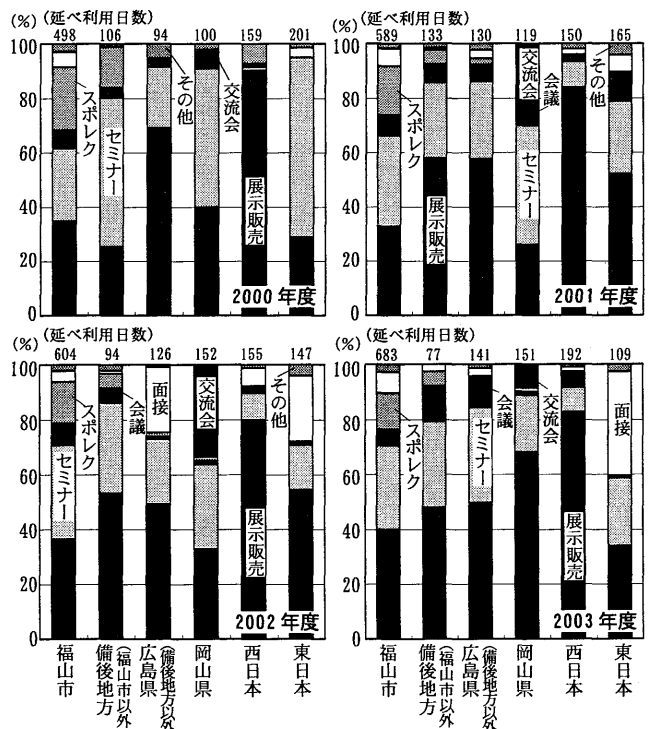


図14 各地域利用者の利用目的別延べ利用日数の構成割合

のが、図15である。同図より、まず展示・販売についてみると、西日本の場合には平均4日近い利用日数となっているが、そのほかは概ね平均3日間の利用となっている。また、平均来場者数は、福山市の場合が最も多く、東日本や西日本や広島県と続き、備後地方や岡山県の場合には福山市の半減以下となっており、展示販売を主催する地域による集客性の違いがうかがえる。なお、会議・セミナーでは、東日本の場合には平均2日間となっているが、そのほかの地域は1日間の利用がほとんどである。会議・セミナーの平均来場者数をみると、広島県の場合には平均100人近い値を示しているが、ほかは多くても平均40人未満と小規模な利用が大半である。また、交流会や面接も平均利用日数は概ね1日間であるが、西日本や東日本の面接では2日間以上に及んでいる点が異なっている。西日本や東日本の面接では来場者数も平均60人以上と多いが、そのほかでは福山市の場合の約20人を除くと、平均10人未満がほとんどである。なお、交流会も平均40人未満で、小規模な集会在中心となっている。

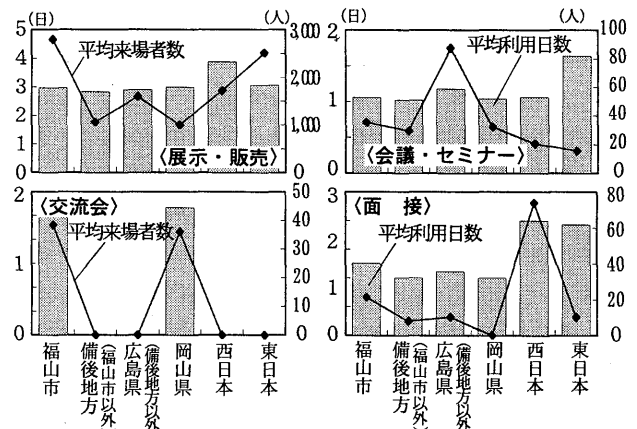


図15 主な利用目的の平均利用日数と平均来場者数

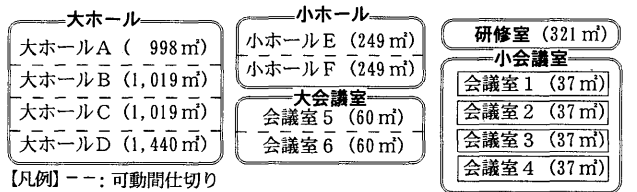


図16 ふくやま産業交流館の諸室構成

5. 諸室の使い方とビッグ・ローズへの要望

5. 1 諸室の利用目的

ビッグ・ローズにおいて利用できる諸室は、図16に示すように、大ホールと小ホール、同時通訳ブースを備えた研修室、2つの大会議室、4つの小会議室である。大ホール(約4,500㎡)は、前述したように、大ホールA～Cに3分割され、用途に応じて個別に利用でき、スポーツ・レクリエーション用の大ホールDとの一体的利用もできる。また、小ホール(約500㎡)も大ホールと同様に、2分割してそれぞれ利用することが可能である。

図17は、2000年度から2003年度までの4年間の利用目的別延べ利用日数をもとに、各室における使い方について示したものである。これをみると、大ホールA～Cは、展示会または販売会でほとんど使われていることがわかる。なお、「その他」には、プロレス興行、集会、利用者を利用記録で特定することができなかった準備などが含まれている。スポーツ・レクリエーション用の大ホールDでも、全体の約4割は展示・販売会に使われており、スポーツなどでの使用は約6割という状況となっている。小ホールでは、ほとんど展示・販売会に使われているが、大ホールに比べて会議・セミナーなどにも使用されている。一方、研修室や会議室の利用についてみると、研修室での会議・セミナー使用は全体の2割弱にとどまり、その大半は大ホールでの展示・販売会のための準備・控室として使われている。また、会議室での会議・セミナー使用は、大会議室でも小会議室でも6割程度となっている。さらに、開館後2年目、3年目と徐々にその利用が増えてきた面接は、主に小会議室が使われており、交流会としては主に大会議室が使われている。

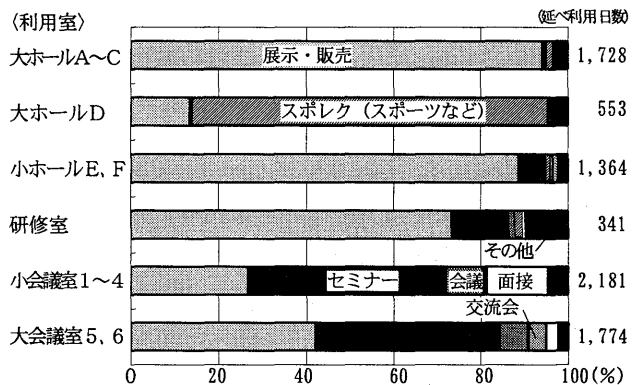


図17 各諸室の利用目的別延べ利用日数の構成割合

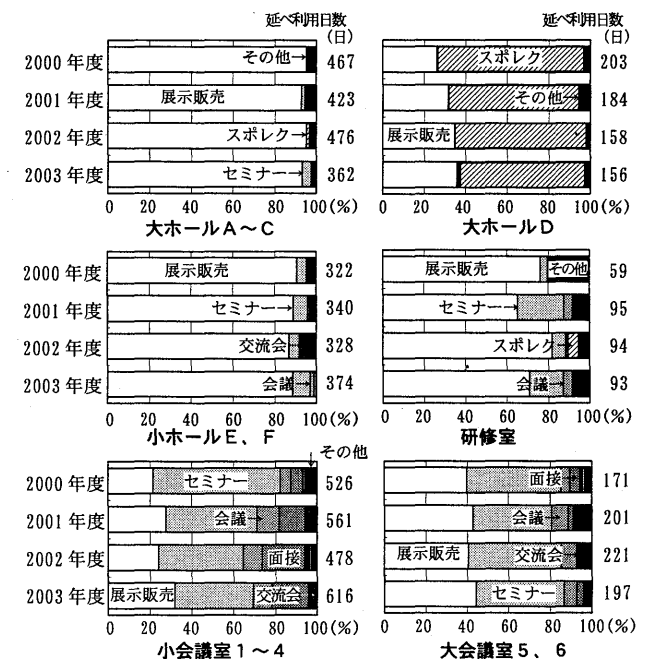


図18 諸室における目的別延べ利用日数の構成割合

図18には、目的別延べ利用日数をもとに、各室における年間の目的別構成割合の経年推移を示した。これをみると、大ホールA～Cは主に展示販売で使われており、大ホールDでは展示販売が漸増している。2003年度の大ホールDでのスポレクの占める割合は6割弱という状況となっている。小ホールE、Fでも、各年度ともにほとんど展示販売に使われているが、大ホールに比べると、セミナーや交流会などにも使われていることがわかる。

一方、研修室や会議室の経年推移をみると、研修室でのセミナーや会議の使用は少なく、もっぱら展示販売の使用となっている。また、大会議室は主に展示販売とセミナーで使われ、小会議室でも同様な傾向を示しているが、展示販売の割合が低く、会議や面接の割合が高いという点が相違している。なお、面接は小会議室、交流会は大会議室がそれぞれ主に使われていることがわかる。

5.2 諸室稼働率の経年推移

ビッグ・ローズの各月における諸室の利用日数を稼働日数で除して求めた諸室ごとの稼働率を年度別に示したのが、図19である。なお、ビッグ・ローズの休館は年末年始のみであり、そのほかに部屋によってメンテナンスで使えない日もあるが、稼働率の算定の際にはこれらは除いて値を求めた。また、同図には紙数の関係から、小ホール、大会議室、小会議室はまとめたものを掲げた。

図19よりみると、大ホールA～Cの月別稼働率は、図8で述べたように、4月、12月などが全般に低い稼働率となる傾向を示しているが、概ね大ホールA→大ホールB→大ホールCの順に折れ線グラフの変動が激しくなっていることが読み取れる。また、大ホールDは月別の変動が比較的少なく、総じて高い稼働状況となっている。

年度別に詳細にみてみると、大ホールA・Bでは初年度の2000年度に比べて2001年度や2002年度は月別稼働率の変動が比較的少なく、利用の安定化傾向をうかがわせている。しかし、2003年度になると月別稼働率の変動がやや激しくなっており、9月や2月の稼働率は高いものの、前年度を下回る月が目立つ。同図に付記した年度別平均値をみると、大ホールA→大ホールB→大ホールCの順に稼働率が低くなる傾向を示している。つまり、大ホールA～大ホールCの順に予約を入れる関係から、大ホールCの稼働率が最も不安定な状態になっているものと理解される。また、スポーツなどの利用を想定した大ホールDの稼働率は年平均値が50%台と高く、大ホールA～Cの値よりも高い値となっている。これは、スポーツなどで気軽に利用され、かつ短時間の利用が多いという現状から、このような結果になったと考えられる。

次に、小ホールの稼働率をみると、大ホールA・Bとはほぼ類似した折れ線グラフの形状となっており、年平均値は40%台でほぼ安定した状態の推移を示している。しかし、研修室の稼働率は全般的に低く、前述した展示販

売が多いという研修室の使われ方を考えると、建築計画的には当初の計画に問題があったことが指摘される。すなわち、施設需要に応じた施設内容という観点、および他方で国際会議にふさわしい建築的内容という観点からみると、その思いがやや先行しすぎ、中途半端な存在になっている状況が想起される。これに対して、大会議室の年平均稼働率は経過年数に伴って向上しており、2002年度には約70%の値を示している。大会議室に比べると小会議室の稼働率は40%未満の月が目立っており、年平均稼働率も2003年度にやっと40%という状況である。

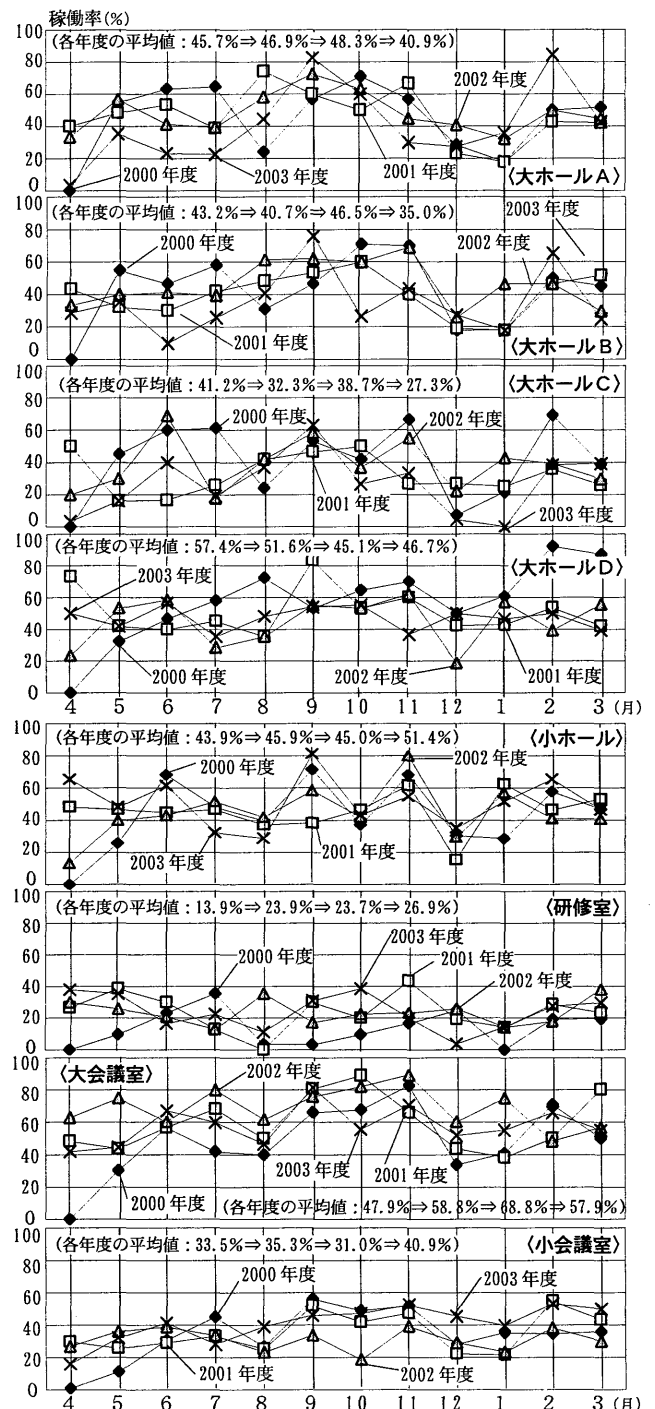


図19 諸室稼働率の年度別・月別変化

5. 3 地域別利用者の大ホールの同時使用状況

大ホールA～Dは一体的にも使えることが、ビッグ・ローズの特徴の一つとなっている。そこで、図20には、地域別利用者が大ホールA～Dを同時に使用している室数を示した。図20より、全地域でみると、各年度ともに利用者の約6割程度は1室使用となっており、大ホールA～Dの4室使用は1割程度で、3室使用がやや増加傾向にあることがうかがえる。この同時使用室数を地域別にみると、福山市は全地域とほぼ似た同時使用室数の構成状況を示すが、福山市を除く備後地方はほとんど1室使用で、岡山県は1室使用が年々減少しているという傾向がみられている。また、西日本や東日本でも1室使用が多く、前者ではその傾向が特に顕著であり、後者は4室使用から3室使用に変化している様子を読み取れる。

図21および図22は、開館後4年間における大ホールA～Dおよび小ホールE、Fの延べ利用日数をもとに、同時使用室数ごとに利用目的別の構成割合をそれぞれ示したものである。これらを見ると、大ホールおよび小ホールは主に展示販売の目的で使われており、スポーツ・レクリエーション用のDホールでも展示販売が5割以上を占めていることから、大小の展示ホールは施設の設置目的に適った利用内容となっていることが確認できる。

この大ホール、小ホールの同時使用室数の経年変化を図23よりみると、1室使用は大ホール・小ホールともに延べ日数としては6割を超えており、4年間の平均では

前者が約68%、後者が約64%となっている。大ホールの同時使用は、2室以上では各年度ともに延べ日数の約3割となっているが、その内訳をみると、3室以上が減って2室使用が増加している。また、大ホールまたは小ホールの同時使用室の組み合わせによる利用状況を表2に示したが、全体の約2/3の利用は1,000㎡程度、または250㎡程度の1室使用となっていることがわかる。このように、分割型の展示ホールの利用状況をみると、1,000㎡程度、または250㎡程度の1室使用が大半を占めていることになるが、2室以上の使用も少なくないことから、分割型展示ホールの効用は十分に理解できる。

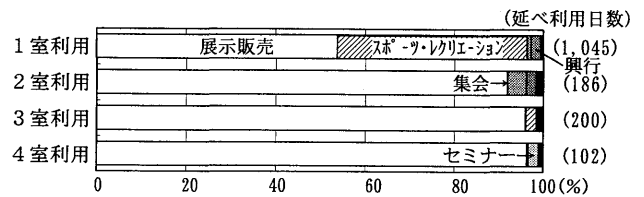


図21 大ホールの利用目的別の同時使用割合

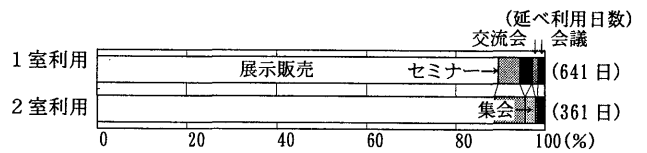


図22 小ホールの利用目的別の同時使用割合

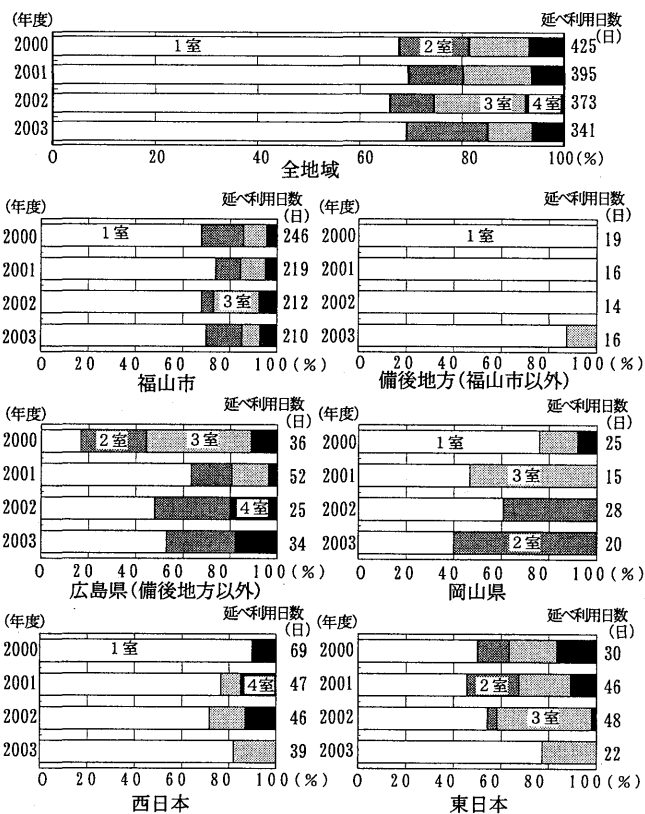


図20 大ホールA～Dの地域別利用者の同時使用室数

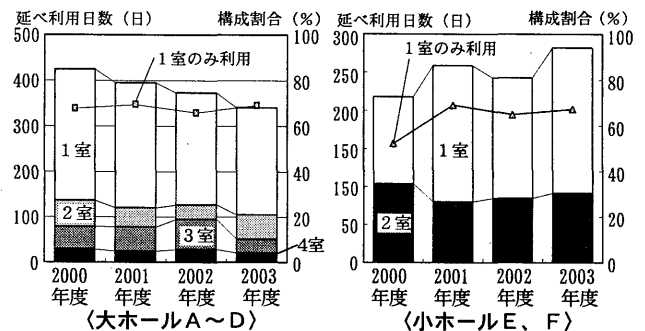


図23 大・小ホールの同時使用室数

表2 大・小ホールの使用組合せ別年間利用日数

利用ホール	2000年度	2001年度	2002年度	2003年度	計
A B C D	29	25	27	21	102
A B C	41	40	53	28	162
B C D	9	13	14	2	38
A B	36	27	18	27	108
B C	8	11	-	5	24
C D	14	4	14	22	54
A	58	77	69	68	272
B	33	30	48	41	152
C	46	26	27	16	115
D	151	142	102	111	506
大ホール計	425	395	372	341	1,533
E F	104	80	85	92	363
E	60	114	80	109	361
F	54	65	78	81	278
小ホール計	218	259	243	282	1,002

(単位: 日)

5. 4 利用者のビッグ・ローズへの要望

表3は、2001年度からビッグ・ローズが利用者に対して実施しているアンケート調査によって得られた施設への要望を整理したものである。ただし、この利用者からの要望には、既に改善されている事項も含まれている。

同表をみると、利用者の指摘の中には施設の構造的な問題から発生しており、その改善が困難な事項も含まれている。しかし、利用者の意見は施設・設備の改修や運営の改善を検討する際の貴重な資料として役立つことが少なくない。その一方で、アンケートに利用者が記入した際の状況や背景を十分に理解しておかないと、見当違いの改善方向となってしまうこともあると考えられる。また、この利用者アンケートには表れてこない施設運営面でのソフト的な課題も少なくないものと推察される。

6. まとめ

以上より、開館後4年間のビッグ・ローズの利用者と利用構造を分析すると、主に次のようなことがいえる。

(1) 開館後4年が経過し、ビッグ・ローズの存在が周知されてきたことによって利用率が安定しつつあるが、利用者の次年度の利用率の低下が課題といえる。特に、全体に占める利用の比重が大きい福山市の場合には、2002年度の新規登録者が2003年度にも利用している再利用率の減衰が目立つ。これは、大ホールの2003年度月別稼働率が、前年度までと比べて稼働率の月別高低の差が著しくなっていることから、利用構造に変化が起きていることがうかがえる。また、利用日数からみると、2003年度の4月および12月の端境期の利用にはやや改善の兆しがうかがえるが、大ホールA～Cの稼働率がほかの月に高い状態とはいえ、利用促進の方策が求められよう。

(2) 延べ利用日数をみると、福山市の利用者が半数を占めるまで漸増し、東日本や福山市を除く備後地方の利用が漸減しており、利用が安定しつつある側面と課題が少なくない側面をみせている。福山市を除く備後地方や東日本の利用の減少から、製造業を直撃している経済不況がビッグ・ローズの利用にも影響を与えていることを物語っている。その穴埋めに、総合物産展のような展示よりも販売を主体とした催しが増加している現状は、ビッグ・ローズの本来の役割を考えると課題といえよう。

(3) 諸室の年度別・月別稼働率や同時使用室数により、ビッグ・ローズの各室の利用特性や課題を把握することができた。同時通訳の設備を備えた研修室は、国際会議に利用される機会はほとんどなく、月別稼働率も40%を超えることはほとんどない。これに対し、大会議室の稼働率は研修室よりも高く、小会議室の稼働率は低いという状況を考えると、これらの諸室計画に再考が必要といえる。また、小ホールの控え室が狭いとか、研修室の利用で客に迷惑をかけたといった利用者の指摘をみると、

研修室や大・小会議室を異なる団体が同時に利用する場合の動線や溜まりなどに対する配慮不足も指摘される。

なお、本研究に快く資料を提供頂いた広島県立ふくやま産業交流館の関係者各位、並びに本調査研究に協力を頂いた平成16年度福山大学大学院修士生片岡美江さん、平成17年度同学部卒業生土屋喜紀君に心より感謝する。

表3 利用者アンケート調査による施設への要望

立地	<ul style="list-style-type: none"> ・公共交通機関の便が悪い。(1) ・交通の便が悪い。(2)
駐車場	<ul style="list-style-type: none"> ・駐車場が他催事との併用で調整が難しい。(1) ・より多くの駐車台数の増加を願う。(6) ・入口(駐車場)から小ホールE、Fまでの距離が大変遠く、東側にも駐車場が欲しい。(2) ⇒ 2003年7月に480台収容の立体駐車場を整備
諸室配置	<ul style="list-style-type: none"> ・小ホールE、Fはメインの入口から遠いので案内板が欲しい。(1) ・駐車場からの入口が1カ所のため大ホールC、Dは使いづらい。(1) ・大ホールBから管理事務室が遠く、管理者とのコミュニケーションがとりづらい。(1) ・研修室を利用したが、会議室前の通路を他の催事が塞ぎ、客に迷惑をかけた。(1) ・大ホールDの更衣室、トイレに外から入れないようにして欲しい。(2)
利用諸室・設備	<ul style="list-style-type: none"> ・大ホールBを使用した、衣料品販売には少し広すぎた。(1) ・小ホールE、Fの控室が狭い。(1) ・大ホールの利用が展示中心で集会には適さない。(1) ・大ホールの天井が高いため、4隅が光源不足でやや死角となる。(1) ・空調の温度にむらがある。(1) ・看板取付けや照明スポットの調整に高所で作業台を移動しながらは不便である。(3) ・大ホールDで床の凹凸(養生シートの重なり)が気になる。(1) ・大ホールDで養生シートを巻くのに時間がかかり難しい。(1) ⇒ 2003年5月に、養生シートを撤去 ・電気容量(200V)が不足・配線ケーブルが細い。(2) ・インターネットが利用できる情報コンセントの整備をして欲しい。(1) ・ATMが近く(または館内)にあればいい。(2)
備品など	<ul style="list-style-type: none"> ・簡易型間仕切りがもう少しあればよい。(1) ・大きいホワイトボードが欲しい。(4) ・ステージ数が不足している。(1) ・テーブルクロスがあればよい。(1) ・大ホールBに時計があればよい。(1) ・冷蔵庫があればよい。(1) ・いすの数を増やして欲しい。(1) ・ロビーのベンチが少ない。(1)

【注】：表中の()内の数字は、回答団体数を示す。

参考文献

- 文-1：無漏田芳信、片岡美江「ふくやま産業交流館の利用状況--- 地域産業交流拠点と地域振興に関する研究・その1 ---」、日本建築学会中国支部研究報告集、第27号、522、pp.653-656、2004年3月
- 文-2：無漏田芳信、永泉智次、土屋喜紀「産業交流ホールの立地と施設特性--- 地域産業交流拠点と地域振興に関する研究・その2 ---」、日本建築学会中国支部研究報告集、第28号、512、pp.581-584、2005年3月
- 文-3：無漏田芳信、永泉智次、土屋喜紀「ふくやま産業交流館における利用構造分析--- 地域産業交流拠点と地域振興に関する研究・その3 ---」、日本建築学会中国支部研究報告集、第28号、513、pp.585-588、2005年3月
- 文-4：土屋喜紀、無漏田芳信「展示ホールタイプと分割型ホールの利用状況--- 地域産業交流拠点と地域振興に関する研究・その4 ---」、日本建築学会大会学術講演梗概集、E-1、5202、pp.437-438、2005年9月
- 文-5：全国展示場連絡協議会監修「E&Cマーケティング2004」、日本実務出版株式会社、2004年2月